

巻頭言

映画『医師中村哲の仕事・働くということ』上映運動から『仕事』・『働く』ことの意味を考える

酒見 友樹（日本社会連帯機構事務局次長／会員）

本作品のテーマは『仕事』・『働く』についてである。この作品は労働者協同組合合法成立記念作品として、ワーカーズコープ、日本社会連帯機構が、長年、中村哲先生の活動を撮影し続けてきた日本電波ニュース社に編集依頼し、完成したものである（2021年12月）。制作にあたっては、日本電波ニュース社スタッフにワーカーズコープの現場を見学して協同労働についてのイメージをつかんでいただき、中村先生の活動のシーンに重ね合わせて再編集し完成した作品である。中村哲先生の生い立ち、活動に重ね合わせながら、『仕事』・『働く』ことの意味を考えてみたい。

中村先生が幼少期を過ごした地、北九州市若松は、日本の近代化を支えた港湾労働者が全国から集まる地域だった。日雇い労働者はもちろん、朝鮮半島の出身者も多数いたという。中村先生の母方の祖父、玉井金五郎と妻のマンは玉井組をつくり、大手の資本とは一線を画し、労働者の生活丸ごとを支えながらともに生きていた。中村先生は様々な境遇の人た

ちが入れ替わり立ち代わりに家に入って生活をする中で育ち、特に金五郎とマン2人の影響を受けたことを語っている。

まさに「仁」と「義」の人だったと谷津賢二カメラマンは中村先生のことを語っている。それは小説『花と龍』（著：火野葦平：本名玉井勝則、玉井家長男、中村先生の伯父）に詳しい。常に弱者＝労働者の立場に立ち、地べたでともに生活をし、生きてきた姿が描かれている。ワーカーズコープの原点が、失業者による仕事おこしであったこと、「死ぬまで仲間の面倒を見よう」という合言葉、まさしく、生活と労働、生きることが一体であったことに重なる。

中村先生は、はじめから決して高邁な思想、使命感でこのような大事業をなしてきたわけではない、小さいころから昆虫採集が好きで、山へのあこがれから山岳医師のグループで活動し、無医村の現実を見てからその場を離れられなくなる。周りの求めに応じる中で学んでいった「セロ弾きのゴーシュ」^{*1}に自らをなぞらえる中村先生は「遭遇する全ての状

*1 宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』：「ゴーシュ」とはフランス語で「下手」を意味する、ゴーシュがチェロを練習する中、やさしくあたたかな動物のとの関り（その中では病気を治すなども）のなかで人間的にも成長し、チェロも上手になったという話。

況が」「天から人への問いかけである。それに対する応答の連続が、即(すなわ)ち私たちの人生そのものである」と語る。地域の必要に応じて、愚直に、地域の人とともに仕事をおこしてきたワーカーズコープの歴史と重なる。

今の日本社会の現状は、本作品を見た若い人の感想「こんな信用できる大人の人がいたんですね」という言葉に象徴される。政治の裏金問題、財界の不祥事、芸能界のスキャンダル報道を見るまでもなく、他者を信じることができなくなっている若者世代。

そんな人たちに対し、中村先生は単純明快に答える「人はなぜ生きるのかを問うことは徒労である。人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。結局はそれ以上、それ以下でもない。…これは人間の仕事である」と。その極めて実践的であり現実的であり肯定的であったその生き様が時に私たちにまぶしく見える。

それでも中村先生は次のように答える。「自分の強さではなく、気弱さによってこそ、現地事業が拡大継続しているというのが真相であります。よくよく考えれば、どこに居ても、思い通りに事が運ぶ人生はありません。予期せぬことが多く、『こんな筈ではなかった』と思うことの方が普通です。賢治の描くゴーシュは、欠点や美点、醜さや気高さを併せ持つ普通の人が、いかに与えられた時間を

生き抜くか、示唆に富んでいます。遭遇する全ての状況が-古くさい言い回しをすれば-天から人への問いかけである。それに対する応答の連続が、即ち私たちの人生そのものである。その中で、これだけは人として最低限守るべきものは何か、伝えてくれるような気がします。それゆえ、ゴーシュの姿が自分と重なって仕方ありません。」「この中で、馬鹿で、まるでなまってなくて、頭のつぶれたような奴が一番偉いんだ(『どんぐりと山猫』)」と。(「イーハトーブ賞[宮沢賢治学会主催]受賞に寄せて」より／『ペシャワール会報』81号 2004.10.13)

「気弱な、欠点や美点、醜さや気高さを併せ持つ普通の人」、まさしく市井の労働者が、仲間と共に支え合いながら生きていくこと、そんな地域社会をつくること、そのことが「平和」の実相ということ。平和を創るということは、まさしく、戦乱と干ばつによる飢餓の地に地域の人々とともに水路をつくり、地域を再生したアフガニスタンでの実践そのものである。中村先生は「平和」を声高に語る目指すべき理想や理念ではなく、極めて具体的な現実変革のための実践そのものだと言っている。

ワーカーズコープの原点である「失業、貧乏、戦争なくせ」という具体的な現実目標とも重なる。協同労働が立ち返る原点をそこに見る。地域の願いや困りごとに地域の人々とともに、真摯に実直に愚直に「働き」、「仕事」に取り組むべきだ

と強く感じる。

2024年2月時点で映画を観た人は2万人近くになり、今後も、増々広がることは間違いない。しのびよる戦争の危機、地球環境危機への処方箋が描けない中、中村先生が示していることの意味は、これからも多くの示唆と勇気と希望を私たちに与えてくれるだろう。この作品を

待っている人たちが日本中にまだまだいるはずだ。本作品の上映運動を通じて、地域のために何かをしたいという仲間が広がり、愚直に協同労働の実践が広がるのが日本社会の変革へ「一隅を照らす」こと、ひいては大きな一歩になるのではないかと思う。

